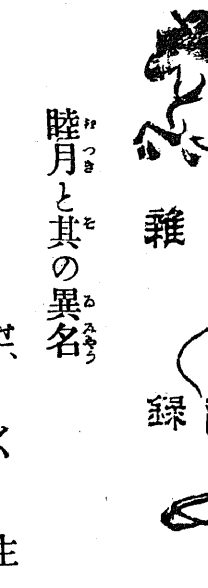

雜録

睦月と其の異名

せ、く生

鶯の冬籠してうめる子は
春のむ月のなかにこそなけ。（藤原言直）

むつ月たつしるしとてやはいつしかと
四方の山邊に霞たつらむ。（紀友則）

むつ月とは實に正月の和名なりけり。其のいはれ中々に面白ければ、まづ其の語の起原とも言はるる正月元日のさま、一わたり記すべし。

元日には、朝早く起き、若水汲みて、舊りにし顔洗ひ清め、四方の神々祈りすまして、此の大御代の尊き高き天地を仰ぎ、雜煮屠蘇に目出度さを寄せて、來し方行く末の幸あるはなし等す。日高くなるまゝに知れる家々の廻禮にと、庭に下り立てば、我れのみならで彼方にも又此方にも、折目正しき羽織袴、さては新しき洋服すがたに、若き、老いたる、女、男の別なく、霞む大路に行き來せり。中にも紙鳶を飛ばすあり、獨樂の廻るを競ふあり、羽子つく者の集ふあり。太平の瑞氣みちみちたる此の樣、むかしとて然らざらんや。人情の厚き、交の深さなど、今にまさるとも劣るべしや。

町を外れ、家まばらなる楢林、松の木の間より、ふりさけ見れば、富士山は雲のかなたにいや高し。

「白き扇さかしまに」とはよくも言ひたりと見ゆ。こゝに又羽子の音かすかに聞ゆ。細き徑たどり行けば、庭の隅なる椿、四五十輪の花あり。椿に隣れる梅樹の樓桁たるに点々として小蝶の羽のチラ〳〵する如きを視れば、梅すでにさけるなり。小女等と共にわれを迎ふるにやあらん。

禮すみて歸へるさ、日當りよき處には蒲公英、菫花の一朶兩朶を見る。寒しとはいへ、自然は眞に陽氣なりけり。

こは今の一月ぞ。されば昔の元日には、鶯などを初めとして、尙記すべきもの數あらんも、今は只和名む月を語るための事として止む。

鳥羽天皇の御時、清輔朝臣まづ「む月は高き賤しき、行き來たるが故にむつみ月といふをあやまれり」と言ひ出でければ、德川時代に至りて「正月は年の始の祝事をして、知る人なるは互に行かよひ、愈々親しみ睦ぶるわざをしけるによりて、この月をむつひ月と名つけ侍り、其の言葉を略してむ月といふと聞き及ひし」など其考をとき廣めしに、彼の語原に明なる白石先生は「この語の義未詳」とて別に何とも考へ給はざりき。

谷川士清氏異說あり。曰ふ、「生月の義、春陽發生の初なれば名つくなるべし」と

生も亦むつみ月の說を信ぜず。谷川氏の如く、「春陽發生の初なれば產月の義なり」と思ふなり。生月に非ずして產月なり。

今少しく其のわけを語らんか。凡そ未開時代には曆なく、自然を以て曆とせるとは東西洋共に然りき。蒙古遊牧の民は年を數ふるに草を以てせり。彼の三草五草は三年五年なり。壽七十草は七十歲

のをなりき。自然界の現象のやがて月々の名とせられしは、我國のみに非ざるなり。うみといへる語は草木の萠出づる意味に用ゐられざるに、むすは神代に高靈產神を始として、廣く發生の意に用ゐられたれば、やがて春の正月はまづむす月と言はれ、終にむ月とは定まりしなるべし。

歌人がむ月の異名ともかそふべきもの六。

さみとり月（紀貫之）

年くれてさみとり月と成りぬれば

ところさへなし小松ひくまの。

暮新月（俊賴朝臣）

くれし月千世かくるらむはつ草の

またみるはかりとしはこえつゝ。

年初月（仝人）

梅もはやさかりになりぬとしは月

名もめつらしくなりにけらしな。

初空月（後鳥羽院御製）

雪はなはふるとしなから立春は

さえにしまゝの初空の月

霞初月（定家朝臣）

けにもはや山風さむみふる雪の

その名はかりや霞初月。

初春月（家隆朝臣）

かすみたつ初春月の朝日影

のどけさ色や空にみゆらむ。

服裝の事（上）

彌生譯

人の、萬物に靈長たる所以は、唯だに、其の心

の靈なるが爲のみならず、其の容姿、外觀の上に於て、亦、然るものあるが故なり。蓋し、美衣、直ちに、以て、人を造ること能はずといへども、人をして、人たらしむるの補助たるべきものは服裝なり。されば、適宜の服飾をなし、以て、野生の見苦しき体軀を被ふは、吾人々類の又當然、なすべき義務にして、殊に青年子女は、常に之れに注意して、必ず、善き服裝をなす事を心掛けざるべからず。善き服裝とは、決して、高價なる衣服を指すにわらず。唯だ、清秀、温雅なる地質を以て、現時の樣式に調製せるものをいふなり。要するに、衣服は、唯だ、華美艶麗なるを避け、偏へに、清淡質素なるものをだに擇ばゞ、適宜の費を以て、容易く、其の善良なるものを調ふることを得べきものなり。

世の少年子女、多くは、其の嗜好定まらず、常に、兩極端に走りて、或は、邊幅を修むるの暇なしとて、故らに敝衣を被り、或は時流の極端者に模倣して、新奇を衒はんとす。是れ、二つながら世の嘲笑を免れざるものといふべし。

現時に於ける、衣服の價は、決して格外なりといふべからず。然れば、如何に收入の少き人といへども、之れを調へて以て、人たるの容姿を修むること能はざる者はなき筈なり。而も常に、服裝の美を保持するの法は、其の衣服を所有するの、多少に依らずして、衣服を處理するの巧拙如何にあるに於てをや。然れば、僅に二枚の衣服を有てるものにして、彼の數知れぬ程を有して、取り代へ引き代へ之れを着換ふるものよりも、却て其の服裝の、常に鮮麗なることあるは此故なり。容儀

を調ふるの法に至ても亦他なし。唯だ、衣服の選擇と、是れが取扱方となり。衣服の地色は、柔和にして、所謂ぢみなるものを擇ぶを善しとす。是れ、唯だに經濟的なるのみならず、又、彼の華麗艶美にして、人目を惹き易きものに比すれば、其の嗜好の善良にして、又極めて、奥幽かしき節の多きものなればなり。諸子、試に眼を開きて其の周圍の人々にして、所謂一業を成し得たる者の服裝如何を一見せよ。彼等は、必ずぢみなる衣服を着くる人々なり。彼等の服裝は決して、人目を惹くが如きものにあらずして、却て其を遠くるが如きものなり。蓋し單に服裝の美を以て人の注意を引かんとするは、賤劣なる賣女の類にして、彼の拙劣にして、見るに足らざる繪畫等の、唯だ其の周邊の金縁によりて、人目を惹かんとするものと、擇ぶところなきなり。又好んで華美なる服裝をなし、以て人目を眩ますとするは、多くは其の性質輕佻浮薄にして其地位亦安固ならざるの人なることを知るべし。然れば、世の青年子弟は、其の服裝を擇ぶに當て、常に色彩の穏和にして、所謂ぢみなるものを心掛くべし。是れ最も善良なる法にして、又最も思慮ある人の採るべき唯一の法といふべきなり。人の服裝は多くは、其人の性癖嗜好の反映なり、去れば衣服によりて、其の人の性質を判すること、多くの場合に於て、大抵、誤なきものなり。

世の青年子弟は、華麗なる服裝の厭ふべきと等しく、又敞衣粗服の惡むべきを知らざるべからず、昔時の所謂、英才の奇癖として許されたる敞衣短褐は、現時の社會に容れらるべきものに非らざる

なり。勿論、現時英才俊傑の人にして、名を揚げ家を起こして、毫も服飾に留意せず、而も世人の、之れを許すものありといへども、其は已に、一家を成し、地位を得たる少數奇才の士にして、始めて之れを爲すべきなり。然れば、世俗の青年子弟たるもの、單に其の服裝の點に於て彼等を模倣せば、必ず大なる失敗に終らんのみ。是れ唯だ、偉業を成し大名を博し得たる、所謂、功名富貴の士の奇癖の一にして、世に立ち、功を成さんとする青年輩の、妄に倣ふべきものにあらざるなり。

感話（一）

小林雨峰

花

何時の頃なりけむ、さる主人の己のが園生に一粒の花卉の種を蒔き出てたるに、やかて其か上には花あまた咲き出てぬ、然る程にそれと知らぬ世の人々はそをたゝ醜草の一種とのみ云ひはやしぬ。

かくて、此の園生の彼方此方を通り行く人々は心もとなく思ひ出てけるにや、うたてくも、口々に花卉をば咀ひける。

花卉はそれにも拘らず、丈いよ〳〵高うのびのびつゝ、花眞盛りに咲き出てたる樣の、日光に映りはえて、宛ら光明の冠り着けしが如く、限りもなく麗はくなりぬ、

かゝる程に人の心や動きけむ、一夜さ墻根打ち越えて、盜賊一人、忍び入り花卉の種をば竊みける、

やがて其を、市街のほとりとえ云はず、高殿の

側りと云はず、到らぬ隈なく蒔きたてぬ、

花卉よ麗はし、麗はしの花卉よと、人々の言ひ囃さんまで、……

如上の短き諷刺の物語、讀む人容易に會得せん、花卉の種、一たび手にして是を蒔かは、何人も花咲き出つるを見ん、こはいとやすき業のみ、

されど〳〵、花は必らず麗はしく咲き出てんとのみ望むも、咲く花の或はうるはしくあり、またはあはれなるあり、花咲くも心のまゝにならぬものと知るや知らずやかくてさがなき人々また花を咀ひて、はしたなき醜草よと呼做さんとするかあはれならずや、

これ『テニソン』の歌の一と節なるが、世の多くの人々は、この物語に似たる事多からずや、他人の事見て始めは夫れ程とも思はず、其の人の成効したるの事を見るや、羨しがりて、われも〳〵と手を出し、自から爲すに及びては思ふやうにゆかぬに、はてはつまらぬ事よと云ふに至る、成効の花は何時咲かぬとはなけれども、その人によりて成効と否とあるを知らば餘所の花は羨やむべきにあらぬかし、

感話（二）

空學

さても精勵に遑なき老漢よ、夜更くる迄油をとばしAは何、Bは何、さてはCD、EGと腦をいためて、われ裂くまで月日を精苦に費すもの、われは何故なりと問はまほし、

哲學とは空無なる夢幻をゆめみるに過ぎざるか經驗の智識によりて獲るところの結果はあらむ、されどそは何を獲たりとなすに足るか、空學に耽

る汝は自から空無の人たらんとして、果てはおのれ自から空漠なる頭腦となさんとてかくは思想を空學に費すか、

かゝる空學に耽けるものゝ吐くところは無智なるそれにわらさるか、例へば天井を眺めて、葡萄の美酒こゝにありとし、心地もよげに指し呼び、おのれ大酒家の模範と誇りがに示すに似もやらすやは、かくては人に笑るそれとも覺らずに、あゝ空學者、汝の精苦遂に荒寥落漠の裡に埋れ了ると知らさるか、

空學者の獲るところの價値それ幾何ぞや、實も結はぬ種を蒔き收獲なきを悟らぬそれと似もやらずや、

「此れ『クリストプロス』の言のそれなるが、學問の活動を知らぬ人への一針ならずや、殊に女子なぞの學ひの道にわけ入りて、社會、人事の事を忘れなばたゝそれ活き字引のそれならずや、

結婚の數理

牧羊

デンハムと云ふ人の説によるに、幼兒にして將來結婚する運命に遭遇する者は、通例二十人の中九人即二分の一足らずなり。一寸考へると頗る怪しむべき程割合少きが如しといへども、其原因とする所は畢竟結婚前に於ける死亡者の大多數なる殊に五歲以下の幼兒の死亡率の大なるによるものにして、五歲以下の幼兒は、大低百人中卅八人は死亡するものなるが、十八歲以前に於て死亡する者は凡そ全人口の百分の四十四人に當れり。米國

に於て女子の數は男子に超過して、其比例は男子百人に對する女子百六人となれり。而して現今生存せる者に付きて調査するに、百人中六十人は未婚者にして三十五人は既婚者、五人は寡婦となる割合なり。されば大道に於ても、滊車中に於ても其他至る所に於て遭遇するものに付きて平均二十人中一人は寡婦か寡夫かの何れかにして、五人の中一人は未婚者なりと知るべし。

英國に於ては婚後夫妻同棲の年月は、平均二十七年にして佛國は二十五年、和蘭及伯耳義は二十三年、露西亞に於ては三十年の割合に當る。

女子に取りて結婚の最も普通なる時期は、概して二十一歳より二十五才の間にして、此間に於て結婚せる婦人は大抵全數の二分の一より多く、他の四分の一は二十五才より三十才までの間に結婚せり、男子に在りては二十一才より二十五才の間に於てするものは、二分の一とは行かず、然れども其三分の一以上は二十五才より三十才までの間に在り。要するに結婚の平均年齢は、女子に在りては恰も二十六才以上、男子に在りては二十八才以下に當れり。而し茲に注意すべき事は、過ぐる十年以後に於て、男女とも結婚の平均年齢の半ケ年後れ來りし事なり。

三月、六月、九月、十二月の中十二月は最も結婚多き月にして春夏の月は次に成り、三月の月は最も少なしとのことなり。

幼兒自作の唱歌

よく分る唱歌であると、其を歌ってる間に、幼兒でも譜に合はせて、面白い唱歌を幾つでも作り出します。左に記すのは

華族女學校幼稚園の幼兒が作り出した唱歌です。眞個可憐なる幼兒の詩趣を見ることが出來ます。

原歌　いざこげこげこげよ
かいささそろへ
拍子を合せ進むべし
いざこげよいざこげよ
あまたの舟に遲れずに

幼兒　いざかけかけかけよ
あしささそろへ
拍子を合せ進むべし
いざかけよいざかけよ
あまたの子供におくれずに。

原歌　幼稚園唱歌　お正月

幼兒　もういくつ（日の數ダケ）ねると運動會
運動會には旗とつて
まりをころがして遊びましよう
早くこいこい運動會

原歌　蝶々

幼兒　一、こどもこども何を見て喜ぶ
瀧車の通るのを見てよろこぶ
トンネルぬけて鐵橋を渡つて
シュッシュッシュッシュッシュッシュッ
ポポポポポポポ

二、こどもこども何を見て喜ぶ
瀧車ごつこするのを見て喜ぶ
澤山つないでステーションへとまつて
シュッ、、、、、、
ポ、、、、、、